

2003 OSAKAにて

臼井 則生



インドネシア暴動 (1998年5月16日撮影)。焼け跡にあった自動車修理工場の後片づけをする従業員—ジャカルタ市内で (毎日新聞社提供)

その時、僕は Jakarta にいた。経済危機と政治的混乱のなかで舵を失った船のように彷徨い続けるインドネシア。98年からの2年間。僕はそこにいた。

暴落する為替レート、マイナス13%の経済成長、80%を超えるインフレ。2億の人口の半分以上が十分な食事を取ることもできない貧困ラインを下回ると言われていた。物乞いをする子供の数が爆発的に増えていた。学校にさえ行けず、わずかな食べ物を探していた。治安も悪くなっていた。暴動も略奪も日常的な出来事だった。

かつて僕はこの国の経済運営を高く評価するペーパーを発表していた。オイル・ショックによる膨大な原油収入をいかに経済の安定化を損なうことなく管理し、目覚ましい経済発展につなげたか。原油価格下落局面を積極的な構造調整政策によっていかにうまく乗り越えてきたか。この国の経済発展は奇跡だった。多くの経済学者が「アジアの奇跡」と称えたように。

現実には何が起きているのかがよく分からなかった。10%近い高成長と一桁のインフレ。危機前の経済指標はこの国がこれ程までの危機に直面することを僕には教えてくれなかった。目の前にある現実には驚き以外の何ものでもなかった。「危機は起こるべくして起こった」と言う学者達がいた。高成長のなかで蓄積された構造的な不均衡、開発独裁制と呼ばれる政府の強いリーダーシップが生み出した縁故資本主義。誤りはこの国の、そして危機に直面しているアジア諸国の経済運営にあると。

そんなことは僕にも分かっていた。しかし、そ

れが経済危機の主たる要因であるとは思えなかった。悲しかった。ずっと昔から全てを知っていたかの様に語る学者達を醜いと思った。呆然と立ちすくんでいるだけの自分はもっと情けなかった。

少数の学者達は違う意見を持っていた。利ざやを求めて世界中の市場を飛び回る投機的資金の流れ、それを可能としたグローバリズムと呼ばれる国際金融市場の構造変化に彼らは注目した。高成長を遂げるアジアに高利を求めて資金が流入した。しかし、一旦マーケットに不安感が広まると市場全体がパニックに陥り、まるで羊の群のように膨大な資金が逆流をはじめた。途上国の経済などとも簡単に吹き飛ばした。僕にはこんなこともよく分かっていなかった。経済学者のくせに「市場」とは何か分かっていなかった。

あれから5年。悲劇など別世界の出来事に過ぎない平和な日本で、ただ優しい空気だけが流れるキャンパスで、僕は同じことを考えている。世の中は移ろいやすい。今では多くの人々が「グローバリズムの危機」を声高らかに唱える。ただひとり国際社会に挑戦したマハティールをあれだけ攻撃した学者達もメディアも。

アジア通貨危機は間違いなくグローバリズムのなかで爆発的に拡大した国際金融市場に起因している。だから僕らは国際金融市場の新しいアーキテクチャーを構築しなければならない。でなければ同様の悲劇は繰り返される。その時、僕はまた絶望的な貧困のなかにある人々の前で、ただ呆然と立ちすくみながら、はにかみにも似た同情の顔を彼らに向けているのだろうか。何が出来るか分からない。ただ、せめて現実から目を背けず考え続けたいと思う。無能な経済学者として。

(経済学部 助教授)

HEADLINE

8 7 4 3 2
面 面 面 面 面
イ 特 特 特 向
フ 集 集 集 関
社 大 法 西
会 学 科 大
人 生 大 学
学 生 三 東
の キ ャ 京
ン パ ス セ
バ ス ン タ
ラ ャ ー が
開 設
設
二 〇 〇 四
年 開
設
特 集
大 学
第 三 者
評 価
の 時 代
へ
社 会 人
学 生
の キ ャ
ン パ ス
ラ

(N・D・Cook)

生き物は植物と動物に分
類できる。真
菌類などの単
細胞も動物系
か植物系に分
類されている
が、ウィルス
は生きてい
る細胞に侵入し
なければ、
活性化されな
い。小学校で
習ったように
動物は酸素を
吸って、植物
は逆に炭酸ガ
スを必要とし
、酸素を「廃
棄」する。こ
の二つの世界
を合わせて、
バランスが取
れた生物界を
形成する▼た
だし、善悪も
含んで、動物
だけが活発に
動くことができ
るので、筋肉の
動作とその動
作における脳
活動のために
、大量のエネル
ギーが要求さ
れる。草食にせ
よ肉食にせよ、
十分にエネル
ギーを獲得す
るためには大
量の物質を消
化し、色々な
形で不要な物
を捨てたり、
排泄したり、
環境を汚染
する▼英国の
ことわざにあ
る「You have
to break eggs
to make an
omelet.」と
いえる。脳と
身体を使う動
物であるかぎ
り、人間は環
境に対して、
植物のように
極端に優しい
、潔癖主義に
はならない。

200306/601

総情創設十周年「高槻キャンパス祭」を開催

平成十五年四月に在日エ
クアドル共和国大使に就任

●法科大学院の概要

高度専門職業人としての法曹を養成



法科大学院で学ぼう

法学部長・法学部教授 岡 徹

法科大学院で
新しい創造の息吹を



法科大学院開設
準備委員会委員長
法学部教授
山中 敬一

一方、法科大学院で学びたいと思っ
ている学生
が、大教
院で、自
己で、他
方、備
校での
論議、タ
ーン
パッケージ
の暗記、定

法科大学院開設
準備委員会委員長
法学部教授
山中 敬一

変革です。その変革の息吹を感じながらその創設に関わっているという実感も、この作業に携わ

か。なにしろ法学の
び方が変わります。一
方、大教
院で、自
己で、他
方、備
校での
論議、タ
ーン
パッケージ
の暗記、定

法科大学院開設
準備委員会委員長
法学部教授
山中 敬一

化された登載練習、こ
れからの、一般的な法学
学習法であり、受験勉強
となっていました。法
学部の、綿密な教
育の喜びの一つです。
何かが変革なのでしょ

学人数の生き生きとした双方
述向授業。ミニテストや論
考力と現場の不絶の検
証、各分野の蛸壺の深化
ではなく、総合的でダイ
ナミックな複合的学習
実務教育の導入教育な
どが行われます。これ
は、社会科学の分野での
大学教育の抜本的変革で
す。新司法試験もこのよ
うな過程を経て養成され
た法科学学院の修了者の
達成度で測る内容の試験
になるはずです。

統一適性試験の出願は
もう始まっています。リ
ードセクターでも模擬試
験を実施します。諸君
も、法科大学院で法学と
司法の新しい息吹とともに
に経験しませんか。この
創造的な息吹が、きっと
新たな社会司法を支え
るユニーク・ロイヤ
ルで明るいあなた
を誕生させるでしょう。

新しい法曹養成制度の導入スケジュール



短
答
式
試
験

- ・ 公法系科目（憲法及び行政法に関する分野の科目）
- ・ 民事系科目（民法、商法及び民事訴訟法に関する分野の科目）

論文式試験

論文式試験

・刑事科目（刑法及び刑事訴訟法）に関する分野の科目

・民法科目（憲法及び行政法に関する分野の科目）

・民事科目（民法、商法及び民事訴訟法）に関する分野の科目

・刑事科目（刑法及び刑事訴訟法）に関する分野の科目

・選択科目（専門的な法律の分野に関する科目として法務省が定める科目のうち受験のあらかじめ選択する科目）

選択科目については、法務大臣が司法試験委員の意見を聴いて法務省で定めることとされており、今後、社における一次や法科大学院における科目の開設状況等を考慮し、検討される予定です。

2 新司法試験の受験資格等

新司法試験は、法科大学院課程の修了及び司法試験予備試験の合格者を対象に行われることになり、また、その受験については、期間及び回数に関する制限がありません。

法科大学院課程の修了者とは、同課程修了の日後の最初の四月一日から五年間期間（受験期間）において、同課程内で受験することとされ、司法試験予備試験の合格者については、同試験合格発表の日後の最初の四月一日から五年間期間（受験期間）において受験することとされています。

※新司法試験は平成十八年試験から、司法試験制度が施行された同十三年から実施されています。

「なぜ、どうして？」が動かす私

し、その原因を考えたりします。自分のことはよく知っているようで案外知らないものです。

そして、そうした「なぜ、どうして?」のヒントを講義の中から、抽出することが、私は比較的得意であるように思います。また、疑問を直接先生たちに質問することで、新たなヒントを得ることも多くあり、当然、講義の中で新たな好奇心をかきたてられることもよくあります。私はこの年になって、学ぶというこの本質をやっと、しかもほんの少し理解できたように思います。これは、

「短く、短い大学生活の中で、他人とは違った自分と、自分の内面から湧き出てくる『好奇心』や『感性』を大切に、育んで欲しいということですね。真剣に取り組める、向かっている努力を認めて欲しい」といいます。

授業で得た最上の喜び

心の間隙も疲れも癒す

長く沈潜していた私の知を刺激したのか、下降ラインをたどる一方だった読書量もぐんと増しました。新しい知識を得ることは何よりの喜びであることを知りました。時には過重な課題に弱気になったこともありましたが、総じてその完成の満足が次に立ち向かえることが出来たと思います。

入学間もなく体育の授業

連日往復五十分の徒歩通学のお陰か、昨年東南アジア最高峰キナバル山（四二〇〇m）登頂を果たすことが出来ました。勉学と日本画制作の時間配分を考えながらの毎日ですが、一方の疲れが他方に癒される関係は捨て難いものです。最終学年が始まってキャンパス



今の本にはいたって充実感
 を味わっています。授業中
 や、或いは家で課題や予習
 復習をしている際にも多く
 の発見があります。「あの事
 はこういう事だったのか」
 「では今後こう考えてこの
 ように行動しよう」等々、
 生涯学習のイメージとして、個人的には高齢者対象
 象と思っていました。しかし
 し実際は小学生も高齢者受
 習も「生涯学習」という枠
 から一歩も出ていないと今
 は思っています。
 現在、一般学生の皆様も
 今後社会へ出て月日が流
 れると同時に、新たな知
 識・教養・技術等の習得
 に迫られる時が必ずや来

学卒の資格が、社会人として働くための一つの条件のように思われているからだろう。しかし大学の存在は、ただ資格取得のためだけではない。高度な知的好奇心を満足させたいという思いも、人々に大学の門をくぐる重要なモチベーションとなりうる。最近だけ

して、そうすることを通して自分を進化させ続けたいと考えたからです。

私の学問に対するエネルギーの源は、「なぜ、どうして？」という好奇心です。その対象は、日常生活の中に多くあります。特に心理学という学問はそうした好奇心を展開しやすい領域だともいえます。例えば、普段とは違った自分自身の言動について、稚拙ながらも

支え合ってこそその
二足のわらじ

その時より私の信条として、高齢化社会を元気でさわやかに生き抜く為に①生涯学習、②生涯マラソン、③生涯勤労の三種目を人生のトライアスロンと名づけ実行することにした。

①の生涯学習の一環として学部卒業後は引き続き学部第2部の聴講生として通学しました。二年前六十三歳で晴れて定年を迎えたので大学院修士課程に入學、今年の三月無事に修了しました。今後は民俗学、言語学等関心の高い研究を続け、たく文学か社会学方面の大学院に進むつもりです。

②の生涯マラソンは毎日曜日に各地のマラソン大会に出場中で、そのため毎朝四時半より十キロのジョギングを十六年間続けています。③の生涯勤労は、平日は今春より再就職した某人材派遣会社勤務する傍ら、祝日と土曜日は各種の陸上競技大会に公式審判員として、ボランティアで活動をしています。

最終的には①ではあわよくば博士号取得を、②では全ての大会で最高齢者完走賞を、③では平均寿命を過ぎた年下の老人を介護するのが夢です。この夢を実行し続けることにより、若い世代の人たちに医療負担、年金負担をかけないために、①学び②走り③働き続けていく自分です。

最後に若い学生諸君へのひと言として、在学中には例えば図書館の最大活用等の大学でしか得られないことを最大限利用されんことを望んでやみません。

(平成十五年三月商学研究科修了 古橋 秀章)

今年の四月より大学院総合情報科学研究科にて勉強しています。普段は飲料メーカーの情報システム部門でアプリケーションの開発・運用に携わっていますが、火曜日の午後と土曜日の週二回大学に通っています。入社してからOJTにてシステム開発手法を学んできましたが、開発の経験を積むにつれ「使いやすいコンピュータシステムとは何か」ということを考えるようになりました。現に、システム開発の現場では技術の習得に追われる一方で、コンピュータのユーザービリティ(使いやすさ)についてほとんど工数をかけることが出来ていません。どうか誰にでも簡単に使

加藤先生が、社会人を受

えるシステムを作ることができないかと紀伊国屋にて手にした本が、四月からお世話になっている加藤隆教授の書かれた本でした。

漠然と考えながらも行動に移せずにいた大学院進学（学）の目標をようやく達成することが出来ました。

中央が私
久しぶりの学生生活が始まって早一ヶ月。
仕事と學業の両立は力的には正直厳しいですが、学生だけをしていたときや、仕事だけをしていたときには気

付かなかつたそれぞれの皇
さや人との出会いを、今け
とりあえず自分なりに楽し
んでいます。そして、何よ
りも私の業務に合わせ、土曜
日に指導して下さいとい
加藤先生、仕事が忙しいと
きも快く授業に送り出して
くれる上司、フォローして
くれる同僚あつての私のキ
ャンパスライフ。本当に開
圀の方々に感謝の毎日です。
す。学生の皆さん。「忙し
い」なんて言い訳せず何で
もレッツトライ!

(総合情報学研究所
丸戸奈津子)

► 編集後記 ◀

以前は「十年一昔」と表現されたものですが、今では「一年一昔」と表現しても過言ではないでしょう。

そんなめまぐるしく流動する社会において、十年、二十年も前に得た知識や技術が通用する分野は数少なくなってきた今日。私は、自

分自身のスキルアップと知識、教養の幅を広げたいと思ひ社会人学生への道を選びました。

普段は会社と大学の往復です。家に帰れば授業の課題と仕事の準備や整理に追われています。そばから見れば忙しくて味気ないよう

に映るかもしれませんが、

二十歳前後の頃なら考えもしなかったことです。学業以外では、仕事でしか使わなかったパソコンに熱中しています。M.O.U.S.等の資格取得も視野に入れながら、とにかく毎日触れるようにしています。とはいえこれも楽しみの一つです。が。:

大学は、學問を志す学生たちと教師との組合として始まったと聞く。しかし今では学生たちのほとんどは、現代社会で必要とされる高度専門技術、資格などを手に入れようと大学にやってくる。大学の専門学校化である。

(若田恭二)

今月の表紙

